

催眠に対する態度を測定する尺度の信頼性

—内的整合性と再検査信頼性の検討—

○中谷智美(甲南大学大学院人文科学研究科)

福井義一(甲南大学文学部)

キーワード：催眠態度、内的整合性、再検査信頼性

【目的】

催眠は心身のケアに有効な技法である(例, Schaefer et al., 2014; Rotaru & Rusu, 2016)。その効果を強く予測されている(Montgomery et al., 2011)催眠感受性の規定因の中でも、催眠に対する態度(催眠態度)は催眠感受性と一貫して正の相関を示す(例, Melei & Hilgard, 1964)ことや、催眠状態期待(催眠下での被催眠者の状態についての信念)が催眠感受性に及ぼす影響を媒介する(Shimizu, 2014)ことが知られている。そのため、催眠の効果を検討する上で、催眠態度は重要な概念であると言える。

海外では、催眠態度を測定する複数の尺度が開発されてきた(例, Capafons, et al., 2004; McConkey, 1986)のに対して、わが国には、催眠態度尺度(清水, 2009; Shimizu, 2014; 清水・小玉, 2001)しかない。本尺度は、改訂を重ねるごとに項目構成が異なる(6項目: 清水・小玉, 2001, 12項目: 清水, 2009, 5項目: Shimizu, 2014)が、総じて内的整合性は高いことから、有用な尺度であると言える。しかし、いずれのバージョンにおいても再検査信頼性や構成概念妥当性は未検討であった。催眠態度の測定の精度を担保するためには、本尺度の信頼性の確認が喫緊の課題であった。そこで、本研究では、全12項目バージョンの催眠態度尺度(清水, 2009)を用いて、各バージョンにおける内的整合性と再検査信頼性を検討した。

【方法】

協力者：クラウドソーシング・サービスを利用して協力者を募った。初回調査と再調査のいずれにも参加した一般成人69名(男性43名, 女性26名)のデータを分析対象とした。平均年齢は43.32歳($SD = 9.23$)であった。尺度構成：催眠態度の測定に、催眠態度尺度

(清水, 2009)を用いて、3つのバージョンの催眠態度得点を得た。得点が高いほど催眠に対して肯定的であることを示す。

手続き：後述の点について同意を得た者に、約1週間隔で2回のオンライン調査を行った。倫理的配慮：本研究は第二著者の所属先のヒトを対象とした研究審査の承認を得た(承認番号21-10)。事前に報酬の支払い条件と本研究の趣旨、プライバシーの保護、データの保管方法などについて同意を得た。

【結果】

催眠態度尺度の各バージョンの内的整合性を検討するために、各調査時における α 係数を算出した結果、どのバージョンのいずれの回においても.85以上の高い値が得られた。次に、再検査信頼性を検討するために、2回の得点間の相関係数を算出した結果、どのバージョンでも非常に強い有意な正の相関が得られた($r_s > .81, p_s < .001$)。Table 1に、各バージョンにおける催眠態度得点の平均値と α 係数、再検査信頼性を示した。

Table 1 各バージョンにおける催眠態度得点の平均値と α 係数、再検査信頼性

		初回調査	再調査	再検査 信頼性
6項目 (清水・小玉, 2001)	M	2.48	2.33	$r = .81$
	(SD)	(0.44)	(0.71)	
	α 係数	.85	.91	
12項目 (清水, 2009)	M	2.41	2.38	$r = .90$
	(SD)	(0.63)	(0.63)	
	α 係数	.92	.92	
5項目 (Shimizu, 2014)	M	2.41	2.34	$r = .85$
	(SD)	(0.71)	(0.73)	
	α 係数	.86	.90	

注) 再検査信頼性はすべて $p < .001$

【考察】

本研究より、催眠態度尺度の全てのバージョン(清水, 2009; Shimizu, 2014; 清水・小玉, 2001)において、高い内的整合性と再検査信頼性が確認された。